

## 1-1 『2009年度 学生センター白書』に寄せて

学生センター長 宮崎伸光

本書は、2008年度に伝統ある学生部から装いを改めた学生センターの2年目の活動報告です。

組織の在り方をラジカルに見直し新たに船出した初年度の最大の事件は、本学の学生が大麻所持の容疑で逮捕されたことでした。私たちは、事件の真相解明に努めるとともに2度と薬物乱用事件が再発しないようあらゆる手段を尽くしました。そして、この2年目の最大の困難は、新型インフルエンザの流行でした。ともに学生生活の健康面に係る問題とはいえ、かなり性格が異なる問題です。その対策には苦慮せざるを得ませんでした。国内に感染者が認められる以前から、いずれ学内にも感染者が発生することを想定し、さまざまな対策を練りました。学生センターの教職員は、その業務の性質上、不特定多数の人々と直に接触することが避けられません。そこで、かつてのトイレトペーパー騒動のように売り切れが続出したマスクをかき集めたり、アルコール消毒に努めたりしました。

新型インフルエンザは、危惧されていた強毒性への変異もなく、世界的流行も収まりましたが、結局本学における感染者は、1,385名（うち教職員は22名）を数えました（ちなみに附属高校は3校合わせて1,305名が感染しました）。本年度は、ボランティアセンターの基幹プロジェクトが揃った年でもありましたが、その1つの林業体験ボランティアの予定を縮小せざるを得なくなるなどの影響もありました。大型企画としては、夕張まちづくりボランティアツア

ーも心配されましたが、無事に予想以上の参加者と成果を得ることができました。その後、学生センターは夕張市と相互協力協定を締結しましたが、これは同市にとっても初めてのことでした。

また、この2009年度は、府中寮が45年間の歴史に終止符を打った年にもなりました。開設当初は、1年生の男子学生が原則1年間に限り寮監とともに暮らしていました。しかし、学園紛争の嵐のなか、大学による実質的管理が及ばない状態が約15年間続くなど、問題も多く抱えました。ようやく1994年度に寮自治会を大学が公認するなど正常化に進み、近年においては寮生による全寮大会を中心として、性別、学年、学部・大学院等の区別なく運営されていました。なお、廃寮に先立ち、今年度から自宅外通学生を対象としてその修学を支援する新たな奨学金制度を発足しました。

学生の自主的な諸活動は、極めて活発です。サークルの数も規模も増加しています。また、正課授業、サークル活動に次ぐ第3のコミュニティと位置づけられるピアサポート活動も盛んに行われています。

学生センターの教職員は、みな後輩である学生たちの生活を支援することに喜びと誇りをもちつつ、日々の業務に追われています。そうした活動が詰まっている本書を手にしたみなさんに、この思いが伝わることを願っています。